

耳で聴く歌 文字で読む歌
～「なつはきぬ」を読んでみる～

うのはなの におうかきねに
ほととぎす はやもきなきて
しのびねもらす なつはきぬ

ひよんな事で、この歌を歌う機会ができた。小学校の中学年のころに教わったような気がする、かなり馴染みのある唱歌「夏は来ぬ」である。小学校で教わった頃には、黒板にひらがなで書かれた歌詞を見ながら歌った。一番と二番しか記憶に残っていないので、教わったのはそれだけだったのかもしれない。久しぶりに歌を歌った日の晩、気になって岩波文庫「日本唱歌集」をめくって見た。

「新編教育唱歌集（明治 29 年 5 月）より」と注釈が入っており、佐佐木信綱作詞・小山作之助作曲。一番から五番まであり、丹念に歌詞を読んでみると驚きの連続になった。

（以下、左側＝歌詞をかなで表記 右側＝漢字を交えて表記）

一番は、

うのはなの におうかきねに	卯の花の 匂う垣根に
ほととぎす はやもきなきて	ホトトギス 早も来啼きて
しのびねもらす なつはきぬ	忍び音洩らす 夏は来ぬ

「卯の花」はウツギの木の花で卯月に咲くことから「卯の花」と言われた。和名の「ウツギ（空木）」は、茎が中空であることから付けられたらしい。

ホトトギスは、鳴き声が「特許許可局」と聞こえることで多くの人に知られているが、姿を見たことがない人の方が多いかもしれない。また、ウグイスの巣に托卵することでもよく知られている不心得者の鳥としても有名な鳥である。

漢字で書くと「時鳥・不如帰・杜鵑・子規」など様々な書き方になる。

「忍び音」は、小さな声で遠慮がちに啼く（忍び泣き）という意味ではあるが、旧暦 4 月頃に聞かれる「ホトトギスの初音」のことを言う言葉でもある。（岩波国語辞典）

二番は、

さみだれの そそぐやまだに	五月雨の 注ぐ山田に
さおとめが もすそぬらして	早乙女が 裳裾ぬらして
たまなえうる なつはきぬ	玉苗植うる 夏は来ぬ

五月雨が山間の田圃に水を注ぐ、天からの水が田を潤し畑に恵みを与えていた。

今や田植えは機械で済ませてしまう農家が多くなったが、昔は家族総出で、さらに近所の力も借りて行われていた。田植えをする若い娘を「早乙女」と言った。主とした衣類が着物だった時代だったからこそ「着衣の裾（裳裾）」を濡らして田植えをしたことが歌になった。

玉苗という言葉は初めて目にしたが、「早苗」と同じ意味らしい。生まれたばかりの赤ちゃんを「玉のような」と表現することがあるが、これと同じなのかもしれない。

三番は、

たちばなの かおるのきばの	橘の 香る軒端の
まどちかく ほたるとびかい	窓近く 蛍飛び交い
おこたりいさむる なつはきぬ	怠り諫むる 夏は来ぬ

「橘香る」というフレーズは他の歌にも使われており、この季節には欠かせぬ表現だったようだ。

「柑橘類の香りがする軒端の窓近くを蛍が飛び交う」目を閉じると付近の風景が目に浮かんでくる。その次に「怠りを諫める」という何やら教訓めいた言葉が出てくるのが不自然な感じがしたが、調べてみたらわかった。「蛍の光」は「勉学に励む」を意味する言葉として使われており、それを受けて「怠りを諫める」という言葉が繋がっているのだそうだ。

乱舞する蛍の姿を見て、自らの日頃の不埒を自戒するという哲学的な歌詞になっている。

四番は、

あうちちる かわべのやどの	棟 (おうち) 散る 川辺の宿の
かどとおく くいなこえして	門遠く 水鶏 (くいな) 声して
ゆうづきすずしき なつはきぬ	夕月涼しき 夏は来ぬ

「あうち」とは何だろう？ 初めてで会う言葉にと大きく悩んだのだが、調べたら現代語読みでは「おうち」だとわかった。さらに「棟 (おうち)」とは「梅檀 (せんだん)」のことと判明。淡紫色の花が咲くのが5~6月頃だということもわかった。

梅檀の花が散る川辺の宿で、門から離れた方角からクイナの声がするよ、見上げる空には涼しげな夕月が・・・という情景。

五番は、

さつきやみ ほたるとびかい	五月闇 蛍飛び交い
くいななき うのはなさきて	水鶏啼き 卯の花咲きて
さなえうえわたす なつはきぬ	早苗植え渡す 夏は来ぬ

最後の五番には、これまでにでてきたキーワードがすべて登場して総括するように歌ってこの曲は終る。

「さつきやみ」は平仮名で読むと何のことやらわからないが、漢字で書くと何となく思い浮かんでくる。ここでは、「五月闇」という言葉が情景を飾る大事な言葉として使われている。

梅雨時の重く雲が垂れ込めた空には、夜にしろ昼にしろ独特の暗さがある。これを「五月闇」と言うのだそうだ。このベタッとした暗闇の中に「蛍が飛び交う」という、この時期ならではの素晴らしい演出になっている。

卯の花・ホトトギス・五月雨・田圃 (田植え)・タチバナ・蛍・センダン・クイナ・夕月・五月闇、この季節の風物を見事に折り込んだ歌詞になっていることが、改めてわかった。

子どもの頃に耳で覚えた唱歌や、ひらがなで覚えた歌詞は、意味がわからずに歌っていた。

後に歌詞を漢字で読んでみたり、古語や古い生活習慣が理解できたりするようになって、初めて歌詞の意味がわかる事が多い。その驚きの体験が中学生の頃だったり高校生の頃だったりするのだが、70才を過ぎてからというものも少なくない。

何才 (いくつ) になっても、「知らなかった」ということは多々あり、「初めて知った」ということもさらに沢山ある。知らなかったことを知ると、少しだけだが進歩したような気がして嬉しいものだ。

以上